埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

〈研究ノート〉
小学校校庭の固定遊具に対する児童の意識について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-03-27 キーワード (Ja): 固定遊具, 児童の意識, 小学校 キーワード (En): play equipment, children's consciousness, elementary school 作成者: 長友, 大幸, 松下, 洸希 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/2000070

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0 International License.

小学校校庭の固定遊具に対する児童の意識について

A Research on Children's Consciousness of Play Equipment in the Schoolyards of the Elementary School

長　友　大　幸・松　下　洸　希†
NAGATOMO, Hiroyuki　MATSUSHITA, Koki

1．研究の背景及び目的

平成26年の国土交通省の「都市公園における遊具の安全確保に関する指針」[1] より、遊びが果たす役割として「遊びは、子どもに対して楽しさを与えるだけでなく、運動能力を高め、知覚の発達や概念形成、言語の獲得を助け、社会性や創造力などを養う機会を提供することによって、子どもの身体的、精神的、社会的発達などを促すものである。遊びは重要な役割を果たしている」と示している。そのため、小学校の校庭に設置されている鉄棒や砂場などの固定遊具は、子ども達にとって１つの活動できる場であり、遊具を通して運動能力を向上させたり、友人との人間関係を築いたりするといった役割があると考えられる。また､「生活科における安全指導の指導上の配慮事項」[2] には、校内では「遊具の安全管理をきちんとするとともに、安全な使い方の指導をする」こと、校外では「公園の遊具や施設の安全を確認し、使い方や遊び方の指導をする」ことと定められている。

山本・松永・向井（2008）[3] は、「公的施設に設置された固定遊具は、一般の家庭ではできない身体全体を動かしての遊びや多人数での遊びを楽しむことができ、子どもの身体的、精神的、社会的な成長に不可欠である」とし、子どもが遊びを通して楽しさを味わい身体的・精神的・社会的発達を促し、安全に関する能力を高めるために遊具を利用することは有効であることを明らかにしている。さらに、「学校における固定遊具による事故防止対策調査報告書」[4] の「第３編　学校における固定遊具の事故防止のための留意点」において、「集団の遊びの中での自分の中での役割を確認するなどのほかに、遊びを通じて、自らの創造性や主体性を向上させてゆくものと考えられる。また、遊具は、多様な遊びの機会を提供し、子どもの遊びを促進させるものである」と示されており、小学校における遊具を含めた施設・設備の設置については小学校設置基準（平成14年３月29日文部科学省令第14号）があり、この中で「小学校には、学級数及び児童数に応じ、指導上、保健衛生上及び安全上必要な種類及び数の校具及び教具を備えなければならない。」と規定されている。

そこで本研究では、固定遊具を設置している小学校において、児童の遊具に対する関心

キーワード：固定遊具、児童の意識、小学校
Keywords　：play equipment, children's consciousness, elementary school

や意識及び遊具への関わりなどを調査し、遊具が児童の意識に与えている影響や、授業で利活用されている現状を明らかにし、将来的に遊具を効果的に利活用していくための方法や児童にとっての遊具の必要性を追究するための基礎資料を得ることを目的とする。

２．調査地の選定

本研究の調査地を選定するのに際し、既往の報告[1~4]から考え、以下を選定条件とした。

①校庭に設置されている固定遊具がある小学校であること。

②中学年から高学年にかけての児童からのアンケートが実施可能であること。

③固定遊具を使って、授業を行ったことがある小学校であること。

そして、本調査ではこれらの条件を満たす川口市立上青木小学校を調査地とした。

３．調査方法

（1）ヒアリング調査

調査方法として、まず学校長及び主幹教諭へのヒアリングを通じて、ブランコやジャングルジム、うんていなどの使用状況、土曜日および日曜日の遊具の使用状況等について把握した。

（2）アンケート調査

次に校庭の遊具に直接関わって遊んでいる児童に対してアンケートを行った。アンケートの内容は、遊具の必要性、遊具での学習についてなど数項目にわたって尋ねた。なお、児童にアンケート調査を行うため、低学年へのアンケート調査は質問内容に対する理解や答え方が児童の発達段階において難しいと考えたため、４年生から６年生に対象を絞ることとした。アンケート用紙は、平成27年11月上旬から下旬にかけて学校に訪問して420部配布した。そして、学級の時間等を用いて学級担任に実施を依頼し、後日回収することとした。なお、回答数は、４年生137部、５年生134部、６年生135部であり、合計406部回収した。

４．結果及び考察

（1）ヒアリング調査

（ｉ）遊具の使用状況

固定遊具の使用について、４年生以降の遊具の使用は、主に鉄棒、ろくぼく、砂場、タイヤ遊具のみとされている（表１）。この理由としては、１、２年生の低学年の子ども達にブランコやジャングルジムなどを使用して遊具への興味・関心などを深めるためとしている。そして、生活の時間を使い、遊具に関す

表１　使用可能な固定遊具

学年	利用可能な遊具	制限
４年生以上	鉄棒、ろくぼく、 砂場、タイヤ遊具	他の遊具の使用は制限
３年生以下	上記に加えてブランコ、 ジャングルジムなど全て	制限は特になし

る安全指導などを行っている。そのため、４年生以降の子ども達に対しては遊具の利用を制限し、基本的に低学年の子ども達を優先して遊具での遊びができるよう指導及び呼びかけをしている。

（ⅱ）土曜日、日曜日の遊具の使用状況

土曜日、日曜日での遊具の使用については、社会体育（主に少年野球や少年サッカー）で校庭を使用するため、学校に来ての土曜日、日曜日の遊具の使用は禁止している。安全指導対策の面から、遊具での事故防止の対策として休日での遊具の使用は禁止にしている。

（２）アンケート調査

（ⅰ）校庭の遊具を使った授業を受けた経験

「遊具を使った授業を受けたことがありますか」との質問に対し、「はい」「いいえ」の２択で回答を求めた。その結果、「はい」との回答は４年生131人（95.6%）、５年生130人（97.0%）、６年生130人（96.3%）となり、各学年とも90%以上の児童が遊具を使った授業を受けた経験があることがわかった（表２）。

次に、どの教科で遊具を使ったかについて、複数回答可として尋ねた。その結果、表３に示すように、「体育」を選択した児童が最も多く、４年生131人（95.6%）、５年生130人（97.0%）、６年生130人（96.3%）であった。したがって、各学年95%以上の児童が回答しており、体育の授業で遊具が使われる頻度が最も高いことがわかった。体育の次に回答が多かったのが「理科」で、４年生20人（14.6%）、５年生35人（26.1%）、６年生42人（31.1%）であった。その他、「生活」「図工」の回答が少数見られ、その他の教科の回答は見られなかった。したがって、体育と理科で校庭の遊具を使った授業の大部分が実施されているものと考えられる。

教科ごとの学習内容について表４に示した児童の自由記述を見てみると、まず、体育では「鉄棒を使った逆上がりの練習」や「逆上がり以外の技の習得」との意見が多かった。また、「砂場を使って立ち幅跳びや走り幅跳びの練習」、「タイヤ遊具を使って馬跳びやタイヤの上を歩く運動」との意見もあり、幅広く遊具が活用されていた。続いて、理科では「砂場を使って砂鉄を見つけたり、集めたりする学習」や「川の流れなどを知るために砂場を使った」との意見があった。主に砂場が活用されていることがわかった。これら２つの教科で利活用が見られた遊具は、学校として４年生以上が利用しても良いとする遊具にいずれも含まれている。しかし、４年生以上には認められていない他の遊具も、特に理科にお

表２　遊具を使った授業を受けた経験

授業を受けた経験	はい		いいえ	
	人数	(%)	人数	(%)
４年(n=137)	131	95.6	6	4.4
５年(n=134)	130	97.0	4	3.0
６年(n=135)	130	96.3	5	3.7
全体(n=406)	391	96.3	15	3.7

表３　遊具を使った授業を受けた教科

授業を受けた教科	体育		理科		生活		図工	
	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)	人数	(%)
4 年(n=137)	131	95.6	20	14.6	4	2.9	6	4.4
5 年(n=134)	130	97.0	35	26.1	15	11.2	12	9.0
6 年(n=135)	130	96.3	42	31.3	10	7.4	7	5.2
全体(n=406)	391	96.3	97	23.9	29	7.1	25	6.2

*複数回答可

表４　教科ごとの学習内容についての自由記述

体育	「鉄棒を使った逆上がりの練習」「逆上がり以外の技の習得」 「砂場を使って立ち幅跳びや走り幅跳びの練習」 「タイヤ遊具を使って馬跳びやタイヤの上を歩く運動」
理科	「砂場を使って砂鉄を見つけたり、集めたりする学習」 「川の流れなどを知るために砂場を使った」
生活	「各遊具の使い方や、使い方に際しての注意事項の説明」
図工	「１つの遊具を画用紙で描写したり、版画の下書きとして描写したり」

表５　校庭の遊具の必要性

遊具の必要性	はい		いいえ	
	人数	(%)	人数	(%)
4 年(n=137)	114	83.2	23	16.8
5 年(n=134)	95	70.9	39	29.1
6 年(n=135)	60	44.4	75	55.6
全体(n=406)	269	66.3	137	33.7

いては活用できるものも少なくないと推察され、その方策を探っていくことは今後必要と思われる。なお、生活では､「各遊具の使い方や、使い方に際しての注意事項の説明」であり、直接遊具を使うというものではなかった。また、図工では、「１つの遊具を画用紙で描写したり、版画の下書きとして描写したり」といったものであり、描く対象としての遊具ということがわかった。

遊具を使って授業を行うことは、児童の遊具への興味・関心を深めるとともに、遊具を使用する際の注意点を自分自身で気づき、考

表６　校庭の遊具の必要性（４、５年生の比較）

遊具の必要性	はい		いいえ		検定結果[a]
	人数	(%)	人数	(%)	
４年(n=137)	114	83.2	23	16.8	*
５年(n=134)	95	70.9	39	29.1	

a: χ^2検定における結果　*p<.05　**p<.01

表７　校庭の遊具の必要性（４、６年生の比較）

遊具の必要性	はい		いいえ		検定結果[a]
	人数	(%)	人数	(%)	
４年(n=137)	114	83.2	23	16.8	**
６年(n=135)	60	44.4	75	55.6	

a: χ^2検定における結果　*p<.05　**p<.01

表８　校庭の遊具の必要性（５、６年生の比較）

遊具の必要性	はい		いいえ		検定結果[a]
	人数	(%)	人数	(%)	
５年(n=134)	95	70.9	39	29.1	**
６年(n=135)	60	44.4	75	55.6	

a: χ^2検定における結果　*p<.05　**p<.01

え行動すること等につながっているものと推察される。一方、学校生活の中でその使用に関して設けた制限が、遊具に対する意識に影響を及ぼす可能性も考えられる。そうした面ついても、今後詳細な調査を進めていく必要があると考える。

（ⅱ）校庭の遊具の必要性

各学年にわたって児童は校庭の遊具を使った授業を受けた経験があり、その教育的効果が期待される。児童自身は遊具のことをどのように思っているかを調べることとし、「あなたにとって校庭の遊具は必要ですか」との質問を行い、回答を「はい」「いいえ」の２択で求めた。その結果、表５に示すように、「はい」との回答が４年生114人（83.2%）、５年生95人（70.9%）となり、４，５年生では校庭の遊具を必要としている児童が比較的多くいた。それに対し、６年生では「いいえ」との回答が75人（55.6%）であり、半数以上の児童が遊具を必要としていないという結果になった。そこで、学年ごとの差異を見るため、χ^2検定により学年間の関係性を見ることとした。その結果、４年生と５年生（表６）、４年生と６年生（表７）、５年生と６年生（表８）のいずれにおいても有意な差が認められ、上級生であるほど必要性を感じる児童が有意に少ないことがわかった。したがって、中学年までは遊具を必要な存在としている児童が多いが、高学年にかけては児童の遊具に対する考えに変化が見られ、その割合は減少してい

く傾向があることがわかった。このことは、学校として高学年の児童には遊具で遊ぶことに対する制限を設けていること、長年遊具に触れ合っていると、遊具での事故やケガや、遊具を理由とした友人とのトラブルなどの経験から、遊具に対する負のイメージをもつようになることなど、マイナス面が理由と考えることができる。一方、遊具がなくても成長に伴って生活面・学習面とも十分であるというプラス面を捉えていることが理由と考えることもできる。そうした面については、今後より詳細な調査を行い、追究していく必要があると考える。

5．おわりに

本研究では、小学校校庭の遊具を取り上げ、その管理や授業での利活用、実際に使う児童の意識調査を通じて、遊具を効果的に利活用していくための方法や児童にとっての遊具の必要性を探った。

固定遊具の授業における利活用については、多くの児童が経験を有しており、特に体育や理科において顕著であることがわかった。具体的な遊具としては鉄棒や砂場などであり、これらは授業以外の場において、中高学年にも使用が認められている遊具であった。

次に、固定遊具の必要性については、低学年で最も必要とする割合が高く、学年が上がるにしたがって低くなる傾向があることがわかった。こうした遊具に対する必要性については、使用制限による日常生活における係りの減少や事故の経験などのマイナス面、児童の成長に伴い遊具に依存しなくても有意義に学校生活を送れるようになったとのプラス面の双方が係わっていると思われるが、本研究では明らかにすることはできず、今後の課題である。

以上から、学校現場の現状や問題点のさらなる把握、子ども自身を成長させるような遊具を用いた授業展開を学年ごとに開発・工夫し、遊具に係わる機会を維持させながら、子ども自身が遊具を通じて追究活動ができる場を提供していく必要があると考えられる。

引用・参考文献

1）国土交通省（2014）：都市公園における遊具の安全確保に関する指針、〈www.mlit.go.jp/common/000022126.pdf〉、2015.11参照

2）岐阜県学校間総合ネット：生活科における安全指導、〈www.gifu-net.ed.jp/ssd/sien/21qahpgenkou/.../06seikatsu10.pd...〉、2015.11参照

3）山本善積・松永沙織・向井麻佑子（2008）：小学校・公的施設における固定遊具の利用、〈petit.lib.yamaguchi-u.ac.jp/.../file/6030/.../C010058000031.pd...〉、2015. 9参照

4）独立行政法人日本スポーツ振興センター学校災害防止調査研究委員会（2012）：学校における固定遊具による事故防止対策調査報告書、p.66-67

† Deceased 19 March 2020